

# 医学者三宅秀による盲人教育会での講習会について(1)

頼住 一昭

愛知教育大学保健体育講座

## A Study of Doctor Hiidsu Miyake's Workshop at Blind Education Corporation(1)

Kazuaki YORIZUMI

Aichi University of Education Faculty of Education, Health and Physical Education

キーワード：三宅秀, 盲人, 瑞典式体操

Key Words : Hiidsu Miyake, Blind, Swedish Gymnastics.

### はじめに

三宅秀 (1848-1938) は、東京大学初代医学部長 (1881-1890) をはじめ、帝国大学医科大学長 (1886-1890)、1888年の学位令制定では日本初の医学博士、さらには、医学者として初の貴族院議員に勅選 (1891-1938)、1903年においては東京帝国大学最初の名誉教授となるなど医学者としての最高の名誉職を擔う<sup>1)</sup>。

そんな彼の功績は多岐にわたっており、なかでも衛生行政、殊に学校衛生に関する法整備に至ってはその創始者とも言うべき人物と評され、学校伝染病予防規程、学校清潔法、<sup>(ママ)</sup>学校生徒児童身体検査規程などは三宅の尽力によるものであるとされ<sup>2)</sup>、彼の死後には斯界今日の基礎を築いた多大なる功績により勲一等瑞宝章が授けられている<sup>3)</sup>。

それはともかく、近代日本の医学教育の普及と発展に尽力した三宅は、各地で行われた講習・講演会などを通して、当時の日本人の健康および身体教育についてその改善を指摘し説論している。彼は、その脈絡の中で当時の「盲人教育」においても講習・講演会を行っていたことが筆者の調べにより明らかになった。

そこで、本稿では近代日本の医学教育の基礎づくりに尽力した三宅による講習・講演会活動、なかでも「盲人教育」について取り上げ、当時、医学界の重鎮であった彼が医学者の立場から盲人教育に対してどのような考えを示していたか、そし

て、盲人を含む障がい者についてどのようなことを述べていたかを明らかにすることを目的とした。

その手がかりは、これまでに確認することができた三宅自身が用いた盲人教育に関する四つの「自筆講演用メモ」(1907年、1908年、1910年、1912年)の中から本稿(1)においては、1907年および1908年に行われた二つの講習・講演会についてその全容を明らかにすることを試みた。

ここでいう「自筆講演用メモ」とは、三宅が講習・講演会を行う際に自ら持参していた自筆のメモである。彼はこのメモを持ち、読み上げていたという。

殊に、「自筆講演用メモ」に記された三宅による二つの盲人教育についての考え方についての詳しい考察は別稿に期すこととし、本稿では三宅が講習・講演会にあたってあらかじめ準備していた盲人教育についての内容とはいかなるものであり、どのような考えを述べようとしていたかについてその全容を明らかにすることにある。

### 本論

#### 1. 盲人教育とのかかわり

三宅と盲人教育(鍼灸、按摩、マッサージ)とのかかわりについて、その始まりを概観してみることとする。

松井繁は自書『近代鍼灸教育の父 奥村三策の生涯』のなかで三宅を「鍼治教育復活の立役者」と評し、明治前期まで続いていた鍼治教育の存廃問題にかかわった人物としてその功績を著している<sup>4)</sup>。

「存廃問題」とは、1885年3月25日内務省達甲第十号をもって「鍼灸術営業取締方」が施行され鍼治教育の禁止を示すものである。

厚生省医務局編『医制百年史』（資料編）によると「鍼灸術営業取締方」とは以下の通りである。

「鍼灸術営業者之儀ハ従来開業之者竝ニ新規開業セントスル者ハ自今出願セシメ其修業履歴ヲ檢シ相当ト認ムルトキハ差許不苦其取締方之儀ハ便宜相設可申此旨相達候事 但既ニ営業差許タルモノハ更ニ出願セシムルニ及ハス」<sup>5)</sup>。

この鍼治教育の危機に際し、関係者はただちに鍼治教育の存廃問題に取り掛かった。当時、訓盲啞院の主幹を務めていたのは帝国大学理学部教授を兼ねていた矢田部良吉(1851-1899)<sup>6)</sup>であった。しかし、彼の専門は植物学であったため、帝国大学医科大学学長であった三宅に「鍼治の功害並びにこれを盲人の手術として危険の恐れ無きや否や」とその取り調べを依頼した<sup>7)・8)</sup>。

依頼された三宅は同大学助教授であった片山芳林(1853-1921)<sup>9)</sup>に意見書を起草するよう指示をした。その後、依頼を受けた片山の起草は、1887年6月3日に医科大学長三宅秀の名のもと訓盲啞院主幹矢田部良吉に報告された。この内容は、官報(1887年6月17日)および、1887年6月18日の読売新聞・朝刊においても明らかにされ、「鍼は有効無外で盲人にさせてもよい」というものであった<sup>10)・11)・12)</sup>。

これによって、鍼治を医学的にも盲人の職業とすることの根拠となり、漢方が衰退をたどる中で、鍼、灸、按摩は盲学校という特殊な機関を得たことになり、以後、鍼治教育の再開につながっていくことになる<sup>13)・14)</sup>。

以上のことから、三宅は盲学校存続という大きな役割にかかわっていた人物の一人とみることができ、この一連のかかわりが三宅と盲人教育との初期とみることができよう<sup>15)・16)・17)</sup>。

## 2. 「盲人教育會ノ夏期講習會 神外講話」について

三宅が用いた計2枚の「自筆講演用メモ」には、その冒頭において「四十年八月■日 盲人教育會ノ夏期講習會 神外講話」と明記されている。したがって、この講習会は「1907年8月」における「盲人教育會ノ夏期講習會」で行われた内容であることが確認できる。

しかしながら、この講習会がどのような経緯により行われたか等については記載がなく詳細は不明である。

以下、1907年8月に行われた「盲人教育會ノ夏期講習會」における講話の全文を明らかにする。

四十年八月 日 盲人教育會ノ

夏期講習會 神外講話

鍼灸按摩ハ共ニ古医方ニ属ス。予カ幼時ハ経絡ヲ信  
 セス常ニ漢医ト争ヘリ。経絡ハ素ト解剖のナルモ  
 陰陽哲理ヲ当テ、却テ実ヲ失ヘリ、故ニ療病ノ術ハ  
 古医方ヲ尚フ。斯ク言ヘハ日新医学ヲ棄ツル如クナレト  
 総テ日新医術ハ古医方ノ理ヲ尋子之ヲ明ニシテ実  
 地ニ應用スルモノナリ、今ノ鍼按術ハ已ニ多少ノ改良  
 アルヘシト雖モ尚ホ進ムニ之ヲ改良シ完全セシムヘキナリ。  
 古医方ハ素ヨリ蛮法ナリ、蛮法自然療法ナリ、今世ノ理  
 学的療法ナリ寒熱、水火、運動力ヲ用フル是ナリ、古  
 医方ハ湯治ヲ主唱ス、按摩導引ハ湯治ト■ヌレハ  
 其効更ニ多シ、按摩ハ他動的ナレト、導引ハ自動的  
 ニテ、瑞典式躰操ニ似タリ、導引術ハ其豫防矯正ノ効  
 蓋シ多カルヘシ。導引術ハ逸居スル上級者ニ必要ナラン。  
 獸類被創スレハ藥石ナシ、唯舌ニテ舐ルノミナレト、唾液ニ  
 殺菌性アルヲ以テ腐敗ニ陥ルトナシ。蛮民カ毒蛇  
 咬傷ヲ受ケレハ石又ハ鉄片ヲ燒キテ之ニ宛ツ、狂犬  
 咬傷ナレハ十分流血セシメ、又燒火着ヲ刺入ス、麁芥  
 撰別人ハ被創部ニ之ヲ行フ。車夫ノ踢貫ニハ煮エ  
 油ヲ注入ス、灸ハ葉方ノ一ニシテ烙鉄ノ一種ナリトス、  
 予ハ鍼灸、按摩共ニ能ク知ラス、又之ニ就キ調ヘモセス、  
 唯古医方ニ接シ、之ヲ一災ニ附シ揚クテ好マス、鍼灸  
 按摩位ヲ見ルノミ、然レト經絡ハ全ク棄ツヘキモノニ  
 非スト信スル一人ナリ、今日ノ盲者ヘ普通教育ヲ受ケ  
 実利一方ノ教ハ不可ナリ

△一穴ニテ三名又五六名 禁針穴三十一禁灸穴四十七

然ル後ニ専門ノ業ヲ学ムナレハ徒ラニ經穴ノ位置名稱  
 ヲ記憶セシメ之ヲ苦マシムルノ必要ナケレト、古聖ノ遺方  
 ニシテ其業ノ神聖化スヘカラサルノ念ヲ生セシメ、業務ニ  
 不忠実ナルモノヲ戒ムル所謂精神教育ノ材料トシテ、  
 經穴ノ中必要ナル点禁穴ヲ存留スヘシトノ意見ナリ、  
 鍼灸ノ理ヲ極メレハ先以テ經穴ヲ調査シ次ニ補  
 瀉迎隨ノ技術ニ亘リ、古來所傳疾病應否ヲ  
 個人、而メ後始メテ学理的教科ヲ改ムルヲ得ヘシ、  
 故ニ先ツ經絡ヲ知ルニ要セサル按摩マツサトチヲ以テ  
 初歩ト為ス、聞ク処ニ依レハ鍼治ニハ必ス按摩トス、  
 偕経路ノ陰陽、任督ノ脈ハ其穴數頗ル多キニ過ク、  
 レハ之ヲ削減セント今人ノ責任ナリ、前段ノ如ク之ヲ教ヘ  
 タル以上ハ鍼灸ニ方ハ共ニ盲者ノ業ト為スト適當トス」  
 関東都督府ハ内地同様之ヲ公許セリ。盲者ハ之ヲ行フ  
 モ危害ナシ、灸ヲヤイトト云フハ燒所ノ意ニシテ、灸点ヲ下ス  
 小尤モ肝腎ナリ、点火ハ具眼者ノ方却テ便ナルヘシト信ス、  
 線香モナシ

西洋ニテモ灸ノ事アレト其術拙劣ニシテ綿、麻、屑、木心、  
 苦綿、(火口)等ヲ以テ之ニ火藥砂石ヲ交ヒ、或吹子ニテ火ヲ  
 吹き、或ハ周辺ノ火傷ヲ防ク等頗ル繁ヲ極メ、烙鉄  
 ノ輕便燒灼電氣ノ便利ノ為排退セラレテ進マス、  
 労働者ハ灸ヲ好ム、三里灸ハ脚氣ノ豫防ナリト云ヒ、  
 ■香川ノ如キ古医方家ハ大ニ稱用セリ、天皇モ亦之ヲ  
 用井ラレタリ。源平強ノ武士ハ治創ニ用ヒタリ。灸ハ施スノ前ニ  
 芟灸、慰斗法、大蒜灸 消毒ヲ要ヒサレト灸創ニハ之ヲ要セン、  
 壯トキハ壯者ニ用ユル分量ニメ、老幼ニハ斟酌ヲ要ス、粗暴無学ヲ戒ムル  
 灸ヲ忌ム日、二日灸等ノ陰陽干支説ハ迷信カモ知レス、二皆一トス

### 3. 「盲人教育 盲、聾 四感生 盲、聾 三感生」について

三宅が用いた計4枚の「自筆講演用メモ」には、その冒頭において「四十一年八月十九日 盲人教育 盲、聾 四感生 盲、聾 三感生 盲人教育會ニテ」と明記されている。したがって、この講演は「1908年8月19日」に「盲人教育會」で行われた内容であることが確認できる。

しかしながら、この講演がどのような経緯により行われたか等についての記載はなく詳細は不明である。

以下、1908年8月19日に盲人教育會で行われた「盲人教育 盲、聾 四感生 盲、聾 三感生」の全文を明らかにする。

四十二年八月十九日

盲、聾 盲、聾  
盲人教育 四感生 三感生 盲人教育會ニテ

盲人教育ハ特種教育ニ屬ス、近時ハ普通ノ教育  
ニテモ心理学上ヨリ研究シテ教育法ヲ論スルナレハ、況テヤ  
特種教育ニハ必ス之ヲ要スヘシ、而メ今日ノ盲人教育ニハ幾何  
ニ此研究ノ進ミアルヤヲ知ラス、先ツ盲人カ觸覚ト、聴覚ト、  
鋭敏ナルヲ利用シテ之ニ鍼按及ヒ音曲ノ二科ヲ主トシ授クル  
ハ已ニ人ノ知ル処ニテ、教育ノ手段ニ点字ヲ用フルトモ甚タ  
適當ナリ、然ルニ盲人ノ特長タル記憶ノ優レタルヲ利用スル  
ト却チ点字ニテ記録シ委子腦裏ニ記スルトモ愈ルノ弊  
ナキヤヲ疑フ、是盲者教育ニ於テ最モ研究スヘキ事項トス」  
記憶ヲ事物ニ譬フレハ恰モ土産ノ中ヘ衣類什具ヲ居ムル  
カ如ク、覚ヘタル事ヲ腦裏ニ仕舞置クナリ、但其片付ケ方  
乱雜ナルカ、余リニ多キニ過キ、且ツ一度モ之ヲ使用セス、將虫  
干等テキヲ為サシテ只管之ヲ仕舞置ク一方ナレハ終ニ仕舞  
失シテ必要ノ起ケタル場合ニ其所在ヲ思出サヌノミナラス、無  
サルモ忘却スルナリ、故ニ時ニ要モナキニ之ヲ点檢シ、出シ入レシテ、  
其仕舞場ヲ暗記スルヲ要ス、是レ即チ記憶ノ練習ナリ、  
教科ノ数多キ今日ニ於テハ記憶ノ練習最モ必要ニシテ、  
記憶ニノミ委子テ暗誦暗記方ヲ怠ルヘカラス、倍失明  
ノ原因ニ廻リテ考フルニ先天的ノモノハ腦中即チ中枢ニテ  
多少ノ欲操フルヘキヲ以テ記憶力其他神經感覺作  
用モ共ニ鈍ナルモノアルヘシ、後天ノモノモ幼時ノ腦膜炎ニテ  
腦ノ發達ヲ廢絶スルモノ、如キハ先天ノモノニ同シカルヘシ、如  
此盲者ハ低能者ヲ教育スルノ方法ニ依ラサルヘカラスト思フ、  
殆ント器械的ニ暗誦セシムルノ他ナキモノカト思フ

○ ○

次ニ觸覚ハ獨リ指先ノ銳敏ナルヲ注目スレバ、実ハ筋覺ノ銳キヲ由ルモノニシテ、尚ホ皮膚ノ知覺モ幾分カ銳ナラシカト思フ、尤モ不注意ノ人、即チ勘ノ悪シキ盲人、(後天ノ中年盲人)ハ皮膚知覺ノ練習ノ足ラサルナリ、余嘗テ京都ノ訓盲院ニテ真直ニ歩行スル術ヲ見タリ、是レ拇指ノ所在ヲ筋覺ニテ知り、其方向ニ歩ムニ過キス、**■**手ヲ加減ナルモノ、又手練ナルモノハ此筋覺ニ基クモノナリ、手加減ノ例ハ鶴匠カ鶴ノ咽ヲ絞ル加減、又接木師カ藁ニテ接木ノ上包ヲスル加減ノ如キ、人ニ傳授シ得ヘキモノハ皆直接ニ**■**伝ヲ要スルナリ、鍼術ハ知ラサレトモ、彼ノ補瀉迎隨ノ手加減ノ如キ、今日ノ電氣應用ノ如キ、詳細ノ伝授法ハナクトモ宜シク師タルモノ、工風ニテ氣合ヲ合点セシムルヲ要ス、按摩導引并ニマツサージ」ハ西洋流ノ教育法アルヲ以テ大ニ便ナルヘシト信ス、西洋ノ器械運動治療ニテハ重錘又ハ發條ニテ何斤何キロ」ト云フ壓力伸縮力ニテ反抗運動ヲ試シシムルモ、器械ニテハ充分ニ行ハレ難シ、各病者ノ状態ニ從テ隨意ニ反抗力ヲ増減シ得シニハ人力ニ如クナシ、即チ按摩師死物

ノ器械ニ優ル所ニシテ、最モ手加減、強弱ノ力ヲ用フル駈引ニアルナリ、叩打、按壓、等手練ニ屬ス、○音曲ハ聽良ノ優ル、ヲ以テ盲人ニ行ハシムル如ク考フルハ非ナリト思フ、是亦感觸即チ筋覺ノ部ニ屬ス、鍵盤ヲ有スル洋琴ノ如キニ於テスラ之ヲ打ツ工合アリ、況ンヤ三味、胡弓ノ如キ所謂勘所ヲ押へ、揆ニテ弾ク、工合筋覺ニ由ラサルハナシ、琴ニテモ押ス、引ク、打ツ、等アリ、尺八ニテモ息ノ吹込工合

開

穴ノ閉ケ、工合メル、カル、エ合等皆筋覺ニアリ、但シ此筋覺ノ工合ヲ伝フルニハ之ニ由リ生スル音色ノ良否ヲ聽覺ニテ知り、其強度ヲ修得セシムルニアルヘシ、俗声樂ニ至リテハ樂器ノ如ク喉頭筋ト呼吸筋等、ノ緊張ニ基クモノナレバ、盲人ノ音曲家ニテ負声ノモノハ少ナシ、哥曲ニ伴シテ節ノ嘍ヒ廻ハシ等ハ工ミナルモ、所謂盲人声ナルモノヲ發スルハ如何ナル理由カ余ハ之ヲ詳ニスルヲ得ス、恐ラクハ發声筋ノ操縦ニ注意ヲ為サ、ルノ罪カ、声樂上、懸壅垂ヲ拳上、反對シ、口蓋マテヲ開張スレハ音声ノ通路ヲ妨クルモノナキヲ以テ必ス負音トナルノ説アリ、是又大ニ研究スヘキ点ニシテ、盲人声ヲ除クヲ以テ音曲家ノ孤音ナリト云フヘシ

○ ○

次ニ嗅覺ナリ是亦盲者定メテ發達セリト思フ、是亦視覺ノ欠ヲ補フニ然ルヘカラサル道理ナリ、余ハ平日一感覺ヲ以テ他ノ感覺ヲ補フ<sub>レ</sub>ヲ注意スル、試ニ熱湯ヲ盥ニ注クニ其音ヲ聽キテ熱サヲ覺トク、水ヲ加フルノ多少ヲ豫知ス、ルノ類ナリ、暗夜ノ路ヲ辿ルニ樹木アル町ニ入レハ市街トハ**■**ラ臭ノ差アリ霪雨ノキ土臭キ、嵐ノキ葉ノ操マシテ其臭キカ如キ皆然リ、偶々本月八日ノ東京朝日新 (線筆者付) 18) 聞ニ樂堂茶話、申もの、香ト、音ト云フ題ニテ色ノ濃淡ヲ音ノ高低ニ比シ得ルナラハ、香ノ強弱モ之ニ比スル<sub>レ</sub>カ出來ルナラシト云ヒ、吾人ノ耳ニ雜多ノ音ヲ聞キテ一々之ヲ聞分ケ得ルカラニハ香モ亦然リテ、慣習ノ熟否デ上達スルナラシト云フ、昔ハ唯強キ香ヲノミ好ミシカ、今ハ輕淡

ノ草花ノ香ヲ尚フニ至リタレハ追ニ練習シテ嗅覺  
 上達スレハ、雨ノ臭、暁ノ臭、雪水ノ臭、月光ノ臭、  
 河水ノ音ノ臭、飛雲ノ臭、等ヲ感スルニ改ルヘシ、  
 若シ音ノ高低ノ臭アルモノトセハ、香ノ品律モ生スヘシトアリ、  
 此説素リ■大説ナレトモ練習ハ此度ニ達スル  
 ヲ得ヘキト疑ナシ、余來タ実験ナキモ擊劍ノ際頭  
 ヲ強ク打ツ、キハ紙片ノ集ル臭ヲ感スト、又深山ニ  
 入レハ雲ノ臭ヲ感シ、日熱ニ物ヲ干セハ日向臭ヲ感ス、  
 醫師カ病ヲ診スルニハ多ク嗅覺ヲ以テ診断ノ助ケ  
 トナセト、耳目等ノ臭備セルモノニハ其用大切ナラス、サレド  
 盲者ニハ熱臭キキ、口中ノ臭氣等■ヲ診断ノ  
 補助ト為スコヲ考フヘシ、盲人教育ノ工夫ヲ要スル処トス」  
 祝友ノ欠乏スルモノハ悲況ニ在ルヲ以テ動モスレハ他  
 ノ景シキヲ以テ色食ノ慾ヲ盛ニシ、又利欲ヲ専ラトス  
 為ニ往ニ不正ノ行為アリ、又感情偏頗トナリ、疑惑  
 措忌、嫉妬、ノ念ヲ生シ易シ、故ニ盲者教育ニハ  
 品性ノ陶冶ニ重キヲ置クヘシ、過日失明軍人ノ  
 卒業式ノ日余ハ大ニ感シタルトアリ、此般ノ失明  
 者ハ仮令卒業スルモ技術ニ於テハ信教スルニ足  
 ラサルモ、彼精神教育アル軍人ノ精神ニテ、女ノ如キ  
 狹偏ナル盲者ノ心ヲ矯正スルノ任アリト思ヒ、彼  
 人ニテ御表トセンコトヲ望ミタリ、蓋シ此一事ハ末技  
 ヲ教エルヨリモ盲者教育ノ骨子、真髓トナスヘトナリ、  
 古來盲者ニメ善行アルモノ、例ヲ集メテ、修身等  
 ヲ偏纂スルコト肝要ナリト思フ

「盲人教育會」におけるメモ（個人蔵、筆者訳）

おわりに

本稿では、三宅が用いた「自筆講演用メモ」の中から盲人教育に関する「盲人教育會ノ夏期講習會 神外講話」、および「盲人教育 盲、聾 四感生 盲、聾 三感生 盲人教育會ニテ」の二つの講習・講演会についての内容を明らかにした。

ここでの三宅は、盲人がこれまで行ってきた鍼灸、按摩、マッサージについての歴史的経緯、さらには、医学者の立場から特殊教育としての役割とその責任について説論している。

個々の著聞については上掲の通りであり繰り返さないが、なかでも、筆者が特に注目したのは盲人を対象とした講習・講演会において、近代日本の学校体育の教材として明治期に初めて採用・導入され学校教育において大きな役割を果たした「瑞典式体操」について紹介していることである。

彼は、「盲人教育會ノ夏期講習會」において、「按摩ハ他動的ナレトモ、導引ハ自動的ニテ、瑞典式体

操ニ似タリ、導引術ハ其豫防矯正ノ効蓋シ多カルヘシ」と述べ、さらに「盲人教育 盲、聾 四感生 盲、聾 三感生 盲人教育會ニテ」においても、「按摩導引并ニマッサージ」ハ西洋流ノ教育法アルヲ以テ大ニ便ナルヘシト信ス、西洋ノ器械運動治療ニテハ重錘又ハ発條ニテ何斤何キロト云フ壓力伸縮力ニテ反抗運動ヲ試シシムルモ、器械ニテハ充分ニ行ハレ難シ、各病者ノ状態ニ從テ随意ニ反抗力ヲ増減シ得ンニハ人力ニ如クナシ、即チ按摩師ノ器械ニ優ル所ニシテ（以下省略）」と述べている。

筆者の調べでは、三宅による以上のような瑞典式体操についての紹介はこれまでもなされており、1884年に出版された自著『治療通論 中巻』では「運動療法」という一章を設け、瑞典式体操を医学者として日本に初めて紹介している<sup>19)</sup>。これは、体育・スポーツ研究分野でこれまでいわれていた1901年におけるヒューズ（Elizabeth Hughes. 1851-1925）による紹介より約17年早

いものである<sup>20)</sup>。

さらに、その後行われた大学通俗講談会（1891年9月19日）では「運動療治 附 按摩ノ話」という演題で講演し、その創始者であるP.H.リング（Pehr Henrik Ling, 1776-1839）を紹介し瑞典式体操の効用について述べている<sup>21)</sup>。

三宅が紹介している瑞典式体操のいずれの内容は、失われた身体各部の不統一の回復が図られる運動であり、それは瑞典式体操の四つの体系の中のまさに医療体操（Medikal gymnastik）に相当するものであると考えられよう<sup>22)</sup>。

このことから、三宅は盲人を対象とした講習・講演会で盲人教育がこれからの近代日本においていかに重要であるかについて説論する中で、医学者としてその効用を認め、早くから紹介していた瑞典式体操を治療法の一つとして紹介していたことは注目されよう<sup>23)</sup>。

したがって、海外から積極的に様々な情報をいち早く集め、その紹介に尽力していた三宅の新しい知見は盲人を対象とした講習・講演会の際にも行われていたことが本稿における二つの史料から明らかになった。

## 引用文献および注

1) 三宅秀の功績については以下を参照。

- ・三宅秀, 「履歴書（文部省作成）」, 個人蔵。
- ・富士川游（1938）, 三宅秀先生小傳 先生五七日忌法要に際して, 中外医事新報, 第1255号, pp.1-6.
- ・東京帝国大学医学部病理学教室五十周年記念会編（1939）, 東京帝国大学病理学教室五十年史（上巻）, 東京帝国大学医学部病理学教室五十周年記念会, pp.46-48.
- ・村上一郎（1941）, 蘭医佐藤泰然 その生涯とその一族門流, 房総郷土研究会, pp.206-207.
- ・三浦義彰（2000）, 20世紀のわが同時代人, 千葉医学雑誌, pp.239-244.
- ・日本女子大学編（2001）, 日本女子大学学園事典 - 創立100年の軌跡, 日本女子大学, p.316.

- 2) 内閣 厚位一六号, 厚生大臣官房 乙第四号, 功労者位勲進叙儀稟申, (1938年3月17日)
- 3) 賞勲局第八八号（1938年3月23日, 3月24日裁可）には以下のとおり記載されており三宅の功績が評されている。

「故従三位勲二等三宅秀ハ明治三年大学出仕申付ラレ以来大学中助教文部大助教文部少教授等ヲ経テ同七年東京医学学校長心得仰付ラレ同十年東京大学ノ設ケラルルヤ医学部三等教授ト為リ同十四年東京大学教授ニ任セラレ医学部長トナリ更ニ同十九年帝国大学ト改マルニ及ヒテ医科大学教授ニ任シ初代ノ医科大学長ニ任セラレ同二十六年退官セリ其ノ間病理学診断学裁判医学医史等ヲ講シ学生ノ指導啓発ト後進ノ誘掖養成ニ努メタル外大学行政ノ枢機ニ参画シ明治初期ニ於ケル我医学教育ノ創業時代ニ於テ一意医学ノ開発ニ軌掌シ漸次学科課程ヲ定メ授業方法ヲ改善シテ其ノ進歩ニ盡力セルノミナラス医学部事務行政ノ創始確立ニカヲ致シ其ノ他医事行政全般ノ確立ニ関スル枢機ニ參與セサルハ無ク斯界今日ノ基礎ハ同人ノ効績ニ負フ所尠カラス又医事衛生ニ関スル各種委員トナリ殊ニ大正九年帝国学校衛生会開設以来会長トシテ克ク其ノ職責ヲ盡シタル等功績顯著ノ者ニ候処本月十六日死去セル趣ニ付此際特ニ同日附ヲ以テ勲一等ニ叙シ瑞宝章ヲ授ケラレ度此段允裁ヲ仰ク」

- 4) 松井繁（2004）, 近代鍼灸教育の父 奥村三策の生涯, 森ノ宮医療学園出版部, pp.29-30.
- 5) 厚生省医務局編（1976）, 医制百年史（資料編）, ぎょうせい, pp.62-63.
- 6) 矢田部良吉：東京大学理学部植物学初代教授（1877）, 東京植物学会初代会長（1879）, 東京盲啞学校校長（1887）, 東京高等女学校校長兼任（1888）, 高等師範学校教授（1895）などを歴任。（宮地正人他編（2013）, 明治時代史大辞典第三巻, 吉川弘文館, pp.688-689.）
- 7) 前掲書4), pp.29-30.
- 8) 文部省（1981）, 盲聾教育八十年史, 日本図書センター, p.38.
- 9) 片山芳林：東京大学医学部卒業（1881）, 東京大学医学部助教授・医院当直医長兼務（1883）, 医術開業試験委員委嘱・看護婦教育方兼務, 鍼

- 灸取調申付 (1885), 東京大学辞任, 宮内省待  
 医局勤務 (1888). (池田文書研究会編 (2006),  
 東大医学部初代総理池田謙斎 池田文書の研究  
 (上), 思文閣出版, p.178.)
- 10) 読売新聞 (1887.6.18.朝刊), p.1.
- 11) 前掲書 4), p.30.
- 12) 「文部省 (1981), 盲聾教育八十年史, 日本図  
 書センター, p.38.」には以下のように記載さ  
 れている。  
 「その報告の趣旨は、鍼治は学理的ではない  
 が、一定の病にはいくらか効果がある。しかし  
 太い鉄針や三稜針などを使用すると害があるか  
 ら、金または銀線の細針を用いるべきであると  
 いったものであった。」
- 13) 前掲書 4), p.30.
- 14) 長尾栄一 (1972), 医学史, 医歯薬出版,  
 pp.118-119.
- 15) その後も三宅と盲人教育とのかかわりは続い  
 ている。例えば、朝日新聞 (1905年4月17日,  
 東京・朝刊, p.2) には、「全国盲人大会」なる  
 見出しで18日午前11時より神田青年会館にて  
 全国盲人大会を開く旨の記事が掲載され、三宅  
 は応援演説者になっている。
- 16) 盲聾学校の史的研究については以下を参照。  
 ・平田勝政 (1989), 大正デモクラシーと盲聾  
 教育－「盲学校及聾聾学校令」の成立過程の  
 分析を通して－, 長崎大学教育学部教育科学  
 研究報告, 37, pp.21-44.  
 ・加藤康昭 (1994), 日本の障害児教育成立史  
 に関する研究－成立期の盲・聾聾者問題をめ  
 ぐる教育と政策, 茨城大学教育学部紀要 (教  
 育科学), 43, pp.125-142.  
 ・菅達也 (2017), 明治・大正期における盲聾  
 学校の支援組織に関する歴史的研究, 長崎純  
 心大学・博士論文, pp.1-203.
- 17) 菅達也氏の研究によれば、長崎鍼灸学校で使  
 用された1892年当時の教科書について以下  
 のように著されている。ここでは三宅に関す  
 る部分のみ引用する。「病理学の教科書とし  
 ては、三宅秀 (1848～1938) の『病理総論』  
 を使用した。著者の三宅は東京大学で最初の  
 医学博士であった。(中略) 以上のように、  
 教科書は当時一流の書籍が選ばれていた。」  
 (菅達也 (2017), 明治・大正期における盲聾  
 学校の支援組織に関する歴史的研究, 長崎純  
 心大学・博士論文, p.30.)  
 ・1912年8月13日には盲聾其他特殊児童教育  
 取調委員囑託 (文部省).
- 18) 日付については、九日が正しく八日は記憶違  
 いと思われる。東京朝日新聞(1908年8月9日,  
 第7890号, p.6.)にて筆者確認。
- 19) 三宅秀 (1884), 治療通論 中巻, 好文堂,  
 pp.318-321.
- 20) 頼住一昭 (1997), 三宅秀の紹介によるリン  
 グの体操について, 平成9年度東海体育学会第  
 45回大会抄録集, p.9.
- 21) 三宅秀 (1891), 運動療治 附 按摩ノ話, 東  
 洋学芸雑誌, 121, pp.495-509.
- 22) P.H. リングが創始したスウェーデン体操は、  
 教育体操 (Pedagogisk gymnastik), 軍隊  
 (Military gymnastik), 医療芸術 (Medical  
 gymnastik), 芸術体操 (Estetisk gymnastik)  
 の四つに区分される。(1946, NORDISK  
 FAMILJEBOKS SPORTLEXIKON ( VI ),  
 KLARA CIVILTRYCKERI AB,p.751.)
- 23) 心身障がい者体育史については以下のような  
 先行研究があり、日本における瑞典式体操につ  
 いても考察されている。しかしながら、明治期  
 に三宅秀が紹介した瑞典式体操についての記載  
 は見当たらない。  
 ・北野与一 (1996), 日本心身障害者体育史,  
 不昧堂.  
 ・北野与一 (1986), 日本における心身障害者  
 体育の史的 research (第13報)－矯正(医療)  
 体操の発展過程について－, 北陸体育学会紀  
 要, 23, pp.7-17

(受付 2023 年 12 月 14 日 受理 2024 年 1 月 9 日)